

聴心器とA I (愛)

慶應義塾女子高等学校一年 大宮薫子

人にはそれぞれ心がある。その心が一つになる事で奇跡が起きる。日本では伝統的に言葉ではなく心で伝える以心伝心の文化が存在する。しかしその前提となる同質性は国際化や情報化の進展により失われつつある。なぜなら私達は異なる文化や価値観に触れる機会が増加し、多様な価値観を抱き始めたからだ。こうした多様性溢れる時代において人と心を通わせることは可能だろうか。私は幼少期のある医師との出会いを通じ学んだ事がある。

私は幼稚園の頃、発熱や激しい耳痛に悩まされていた。病名は急性中耳炎。一か月毎に再発するにつれ、私は耳痛で眠れなくなった。治療は点耳薬や抗生物質等の投与だけでなく、鼓膜に穴を開け溜まった膿を排出する鼓膜切開にも及んだ。しかし数カ月経過しても病気は一向に改善しなかった。その結果、私は滲出性中耳炎を患い難聴になった。遂に大きな病院を紹介され、私は冒頭の医師と出会った。

医師の治療方針は当初一般的な鼓膜切開だった。しかし聴診器で私の心臓の鼓動を聞き問診した後、治療方針を変更した。私にとって発熱や耳痛、音が消えていく事は恐怖だった。しかし実はそれ以上に当時、幼稚園でプールを見学する時間も苦痛だった。友達はずいぶん泳げるようになっていた。しかし泳げない私は周囲に取り残される焦燥感に駆られていたのだ。医師との問診の中で私は勇気を出し「いつプールに入れますか？」と質問した。先生は少し驚いた表情を浮かべた。なぜなら耳に水が入る行為は治療の妨げになるからだ。先生はその後の会話を通し、治療方針を手術による鼓膜チューブ留置術に決定した。小さなチューブを中耳腔に挿入し六カ月間留置する治療だ。初めての手術に私は抵抗し不安で泣き続けた。しかし、手術の方が確実に治り直ぐに水泳もできるという医師の言葉に背中を押され、私は手術を決意した。手術は成功し、私の難聴や中耳炎は完治した。先生が用意したオーダーメイドの耳栓のおかげで私は直ぐにプールにも参加できた。必死に練習し苦手だった水泳を克服した。私の未来が開けた瞬間だった。

聴診器ではなく聴心器。先生は聴診器で心臓音だけでなく私の心の声を聞いていた。そして病気の治療だけでなくその後、私の望む人生に近づくよう導いてくれた。

医師のトレードマークである聴診器は医療技術が進歩した現在でも200年以上使われ続けている。聴診器の定義は体内の音を聞き取る道具とされている。しかし本当にそうだろうか。聴診器は、殻に包まれた私達の心の声を聞く為に受け継がれたバトンのように感じた。あの手術がなければ、私は水泳を克服できず苦手な事を回避する人生を歩んでいただろう。通例や固定概念に縛られる事なく、個人の状況を把握しようとする先生の「聞く力」が私の未来に小さな奇跡を起こした。

そして小さな奇跡を起こしたもう一つの要因は「伝える力」だと私は考える。幼少期の私は専門家である医師に対して、病気治癒後にやりたい事を未熟ではあるが伝えた。その内容は病気再発を誘発しかねない無謀なものだった。しかし医師は私の心に寄り添い治療方針

を再検討し温かい言葉で応援した。双方向に伝え合い、心を通わせることで早期病気回復への道へと繋がったのだ。

近年の情報化の中でも特にA I 技術は急速に発展している。もしこれがA I 医師ならどうだろうか。確かにA I 医師は短時間での情報処理能力や診断に優れたスーパードクターかもしれない。しかし、人間の医師にあつてA I 医師にはないものはA I (愛) のある伝える力だと私は考える。A I 医師による機械的で単調な言葉では、心を通わせ人生における奇跡をもたらす薬は処方できないと私は考える。私は幼少期に出会った医師から、聴心器で人の心聞き、相互にA I (愛) を持って伝え合う大切さを学んだ。

雛が卵の殻を破る時、絶妙な機会に母鶏が外から殻をつつき助ける様子を表現する啐啄。一見、以心伝心の類義語のような言葉だ。しかし私は言語というコミュニケーション手段を持たない雛鶏が、音を使い懸命に母鶏に伝える姿を想像する。つまり母鶏の聞く力と雛鳥の伝える力により、心が通い殻を破る奇跡が生まれると私は解釈した。

ウクライナ侵攻やパレスチナ問題、地球沸騰化等様々な問題を抱える現代社会。今こそ聴心器を周囲に向け心声を聞く時だと考える。そして多様性を前提に相互に伝え合う事で新しい未来は必ず開けるはずだ。私は今後様々な学びを通して固定概念に縛られず本質を聞き、真に他者に寄り添う能力を身に付けたい。そして心を以って伝え合う事で、他者への理解を深めたいと考えている。それが多様化する時代において、相互に心を通わせる社会に繋がる事だと信じている。